

『お茶の水地理』編集に関わって

内田 忠賢

『お茶の水地理』50号、おめでとうございます。年1号の発刊ですから、49年前の3月に初刊されたものと思われます。私が生を受けた（1959年4月生まれ）1年後に創刊して、現在まで続くとは、卒業生・歴代教官の諸先輩方のご努力に、頭が下がります。お茶大から離任した私が、『お茶の水地理』（以後、『お茶地理』と略）に寄せて、雑文を書くのは気が引けますが、記録の何らかの足しになれば、幸いです。

私が、お茶大に赴任したのは、1994年4月です（転出は2006年3月）。若気の至りもあり、最初は『お茶地理』を、さほど評価していませんでした。大学院生は、第1作目をトップ学会誌（『人文地理』など）に投稿すべきだと考え、身内の雑誌『お茶地理』などがあると、院生の研究には、かえって気が散るではないか思いました。「ハードルが低い雑誌に、論文を投稿すれば良い」という安易な雰囲気になることを心配した訳です。

お茶大着任後、数年経ち、周囲が多少とも見えるようになると、社会人入学の院生を含め、『お茶地理』の主な投稿者候補は、多様な立場、様々な思いを持っていると気が付きました。（かつての）京大で純粋培養された身には、初め「院生は皆、プロの研究者を目指すもんや」としか考えられなかったのですが、実際は、博士前期課程（当時、修士課程）在学者の大部分が一般就職を考え、また、博士後期課程（当時、博士課程）在学者にも「ライフワークとしての学問」を楽しもうとされる方がおられます。大学院の役割が多様化してきたので、よく考えれば、当たり前のことです。当時、「若手」3兄弟だった熊谷圭知さん、杉谷

隆さんと私は、院生にとっての『お茶地理』活用法について、夜遅くまで、話し合いました。むろん、3人とも、プロの研究者を目指す院生の勝負作品は、『お茶地理』ではなく、トップ学会誌に投稿すべきだとの共通理解の上です。その一方で、院生には、研究者を目指そうと、そうでなかりうと、成果を発表する機会を作るべきだ、『お茶地理』をフルに活用すべきと考えました。研究につながる作品なら、何でも、積極的に載せれば良いという方針です。むろん、以前から、卒論を「論文」として誌上に残すことは、ありましたが、新しく、（院生の）調査報告、研究動向の紹介、書評などを掲載する試みを始めました。そのことが、『お茶地理』の評価を下げるとは思いません。そもそも、トップ学会誌と比べる必要はないのです。

その頃から、トップ学会誌の代表『人文地理』の「学界展望」欄に、『お茶地理』掲載文が引用されるようになりました。積極策が、あながち無駄ではなかったのだと思います。

今後、お茶大の社会的役割の変化に伴い、『お茶地理』の内容も大きく変わることは間違いありません。受益者負担の原則から誌面を再考する必要もあるでしょう。いずれにせよ、会員が積極的にフル活用できる媒体になりますように。むろん、会員である私も、積極的に後方支援し、また活用させていただきます。ありがとうございました。

うちだ・ただよし

元助教授

奈良女子大学・人間文化研究科教授

